

【全体講評】

ここ数年、「ビックリする」内容でしたが、今年は、よくも悪くも驚きがない試験だったと思います。事例Ⅰ、Ⅱは事故を起こしやすい設定になっています。また、事例ⅢとⅣは、比較的処理しやすい問題ですが、こちらは考え過ぎるとバランスを崩す可能性がある問題です。多くの受験者が、終了後も「スッキリしない」「モヤモヤする」印象を持っていると思います。この点は例年通りです。しかし、結果的に約2割が合格するということを前提に考えると、「大事故を連発しなければ合格する」という点も例年通りです。

それぞれの事例について、簡単に特徴を整理してみます。

事例Ⅰは、3問構成ですが、第1問と第2問は複数の設問構成で、設問レベルでは5つですので、例年どおりです。まず比較的難易度が低い第1問（配点40点）で、ベースの得点を積み上げたいです。第2問、第3問は結論を1つに絞り込もうとせずに複数の結論で解答を編集する方針を採用できれば、かなりの得点になると思われます。ただし、A社の事業の変遷、事業や組織構造が読み取りにくいので、「思い込み」で反応してしまいやすくなっていますので、多くの受験者が苦戦したと思います。

事例Ⅱは、第2問（配点30点）と第4問（配点30点）の対応がポイントになります。第2問と第4問はそれぞれ異なるニーズに対応するものですから、第2問のターゲット層を誤ると第2問で得点できないだけでなく、第4問でも得点できないという大事故につながる可能性があります。逆に言えば、第2問のターゲットさえ適切に対応づけできれば、かなりの得点になる可能性があります。

事例Ⅲは、昨年に比べるとかなり得点しやすい問題構成になっています。特に第1問から第3問までは、素直に解答を検討すれば、それなりの解答になったと思われます。第4問は、ここ数年C社全体の課題解決が問われていますが、今年もそうでした。問題要求に従い、2つの新事業候補について、それぞれ検討した上で解答できればうまく対応できたと思います。

事例Ⅳは、昨年同様、得点しやすい問題できっちり得点を積み上げれば十分な答案になる問題構成です。計算処理の比重は軽く、「正確な問題の理解」が最大のポイントになります。それぞれの処理そのものはシンプルですが、見慣れない設定が含まれているため、問題の理解で混乱した受験者も少なくなかったようです。

以上